

実践報告

校内で教師が共に考える「勉強会」の実践

—外国につながる子どものことばの教育を支える試みから見える教師の変容—

加藤香代・池上摩希子

キーワード

外国につながる子ども, 勉強会, 国際教室担当教員, 対話

1. はじめに

本稿は学校現場に急増する外国につながる子ども⁽¹⁾に対して、教師⁽²⁾は「どのような『ことばの教育』⁽³⁾を行っていけばよいのだろうか」という問いを起点とする。外国につながる子どもに関する課題を、子どもと関わる教師が自分事として考えられるようになる必要があると考え、小学校の校内に「教師による校内自主勉強会」(以下「勉強会」)を立ち上げた実践を報告する。この「勉強会」の実践を通して、校内の教師が学び合うことの意義を考えてみたい。また、「勉強会」を作り、参加を続けることで、教師は何を考えたのか、どのような変容があったのか、1年間の記録から検討を行う。

2. 背景

2-1 日本の学校に通う外国につながる子どもたち

世界のボーダレス化が進み、日本にも多くの外国人が訪れ、生活するようになってきた。2018年6月に発表された統計⁽⁴⁾によれば、国内の在留外国人数は2,637,251人となり、この数年での増加率は特に大きい。それに伴い、全国の公立小・中・高等学校等における外国につながる子どもも増加の一途をたどっている。

「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査」の結果(文部科学省,2019)からは、公立小学校に在籍する外国人児童生徒数は93,133人であることが明らかになっている。そのうち日本語指導が必要な外国籍の児童生徒数は、40,485人で、10年間で約1.5倍に増加している。また、日本語指導が必要な日本国籍の児童生徒数も10,274人とされ、同じく10年間で約2倍の増加を見ている。

2018年12月には外国人労働者の受け入れ拡大に向けた在留資格を創設する「出入国管理及び難民認定法及び法務省設置法の一部を改正する法律」(法務省,2018)が成立した。日本で働く外国人は今まで以上に増加し、それに伴い親の帯同・呼び寄せにより日本の学校に編入学してくる子どもたちの課題は、さらに深刻さを増すことが予測できる。外国人児童生徒が学ぶ日本の学校は環境整備が十分だとはいえないのが現状だからである。学校現場において、外国につながる子どもに関する課題は、「他人事」では済まされない、普遍的な教育課題の一つとなりつつある。

2-2 A小学校及び学区の概要

ここで、本実践を行ったA小学校について紹介しておく。A小学校は、首都圏の外国人集住地域にある公立小学校であり、全児童の約1割強にあたる70人(2018年11月現在)を外国につながる子どもが占める。10年前に2校の統合によってできた学校であるが、統合前にはいずれの学校でも人権教育を行っており、児童一人ひとりを大切にする教育は現在も引き継がれている。そのため、全学年のカリキュラムには、多文化共生授業が位置づけられている。市においてA小学校は、人権教育の先駆的な役割を果たしているといえる。

また、学区には外国につながる子どもとその家庭を支援する公共施設がある。施設では、事業の一つとして、日本語学習サポートが週2回行われており、A小学校に在籍する外国につながる子ども以外にも他校の子どもも多く利用している。A小学校の学区は、長年、外国につながる子どもやその家庭を多方面から支えている地域であり、多様な背景の子どもたちが共に生きることが、ごく自然なことと受け止められる環境である。

2-3 国際教室の開設

前述のように、日本語指導が必要な児童生徒が年々増加しているなか、A小学校においても、2014年には国際教室^⑤が設置され、加配教員が配置された。当時、国際教室で取り出し指導の対象となる児童は5名であったのに対して、2019年9月現在、32名の児童に対して週2時間から5時間、子どもの実態に合わせた日本語と教科の指導が行われている。2018年度まで加配教員は1名のみで、児童数の増加に伴って個別指導や入り込み指導が難しくなり、グループによる少人数指導で児童同士のかかわりを積極的に取り入れる授業形態に変化してきた。2019年度から加配教員が1名加わって担当者が2名となったため、学習支援、生活支援の充実が図られている。国際教室では、外国につながる子どもに対して、家庭訪問、個別面談、緊急時における電話連絡などを行っている。学習に関しては、毎週、在籍学級の1週間の予定に基づいて、担任と相談して連携した授業を考えたり、毎時間の国際教室での学習記録を担任と共有したりしている。来日直後の児童に対しては、市教育委員会から子どもの母語が話せる日本語指導等協力者が約1年間、派遣されている。

さらに、A小学校では、国際教室設置時より、全教職員を対象とした校内研修を年に2回行ってきた。1回は、国際教室担当教員から、最近の動向や外国人児童生徒研修の報告、国際教室での取り組みや担当者として全教職員に伝えたい内容についての報告を行う。もう1回は、日本語教育を専門とする外部講師^⑥を招聘している。2015年から2018年に至るまで、外国につながる子どもの実態に合わせて、教師が研修で学びたい内容を示し、外部講師から直接学ぶ機会を設けている。

2-4 学校現場が抱える課題

日本語指導が必要な児童生徒が増加する学校現場が抱えている課題の一つとして、日本語指導担当になった加配教員に関するものがある。A小学校でも国際教室担当の加配教員は日本語指導に関する専門的な教育を受けていない、いわゆる一般の教員である。筆者(加藤)自身も教員時代に国際教室の担当になった際、外国につながる子どもがどのようにことばを学んでいくのか、教師はそのために何をすればよいのか、相談する人もおらず、試

行錯誤の毎日であった。それまで培ってきた教師としての実践知をたよりに取り組むほかはなかったのである。しかし、実践知だけでは対応できない壁にぶつかった経験も多い。外国につながる子どもが増えれば、従来のように日本語指導等協力者に頼るのではなく、担当する教師自身が外国につながる子どものことばの教育を自分事として認識し、学校全体で取り組んでいかなければならなくなる。そして、外国につながる子どもと直接かかわることになって初めて、子どものことばの教育という、教師にとって新たな学びを迫る場を教師自身が求めるようになる、と強く感じていた。

二つ目の課題となっているのが、日本語教育に関する研修である。学校教員を対象としては、現在、多くの自治体が研修を実施しており、国際教室担当教員や外国人児童生徒教育の担当者等が学校の代表として研修に参加する機会が多い。しかし、研修の内容や参加できる対象などについて、教師の満足度は高いとはいえない。情報共有が中心となり、毎年「同じような内容」にならざるを得ないのが現状であるからではないか。近年では、文部科学省の事業の一環として実施された研修に関する発表においても「これまでのマンネリ化した情報伝達・知識獲得型ではなく、研修自体が参加教師の意識変容の場であると位置づけ」（齋藤・菅原 2018 : 321）とされるなど、教師研修も徐々に変化してきている。しかし、「特別の教育課程」に位置づけられたこともあって、個別計画の立て方や提出書類の書き方など文書の作成に関して多くの時間を費やし、子どもの学びをどうするかにまでは議論が及んでいない現状もある。筆者（加藤）が参加した研修でも、日本語以外を母語とする子どもが新たに日本語という言語を学ぶには時間がかかること、日常会話ができるようになって学習に必要な日本語が理解できるようになるまでには多くの時間が必要であることなどについて、理論的な説明がなされていた。しかし、こうした研修を受けても、「では、私は子どもたちに何をすればいいのか」という不安は消えないままであった。

このように、情報共有や理論紹介が中心の研修では、現場が必要とし求める内容との乖離は否めない。そこで筆者（加藤）は、学校教育現場の仲間と共に、外国につながる子どもにとってのことばの教育を考え、その意義を明らかにすることが、自分のためにも教師のためにもなり、何より目の前にいる子どもたちの役に立つのではないかと考えた。筆者（加藤）は、週1回A小学校でサポーターとして取り出し指導を行っている。そこで、国際教室担当教員のE先生に声をかけ、共に、外国につながる子どもの学びを考える自主勉強会を校内に立ち上げたのである。

3. 校内の教師が共に考える「勉強会」の取り組み

3-1 「勉強会」の立ち上げ

「勉強会」を開始したのは2017年11月である。「外国につながる子どもの「ことば」を中心に、教師が共に悩みを話したり、教室実践を伝え合ったり、共に支援方法を考えたりする時間」であると定義づけて始めた。教師はこれまでの経験から、個々に様々なリソースを持っている。しかし、それは教師個人のものであり、教師個人の実践に終わっている。筆者らは、多様なリソースを共有し、教師同士が多層的につながり、子どもの学びをつなぐ役割を「勉強会」という場が果たせないだろうかと考え（図1）、まず、学校長に「勉強

会」の趣旨を説明し承諾を得た。そして、行事予定と照らし合わせ、教師ができるだけ参加しやすいように会議のない金曜日に日時を設定し、月1回、授業終了後に1時間程度、国際教室の場所を使って「勉強会」を行うこととした。

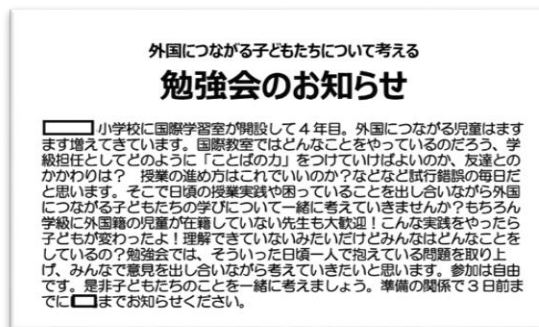


図1 勉強会のお知らせ

3-2 「勉強会」の目標設定

「勉強会」の内容と目標は、学校の全教職員に任意でアンケートを実施して決定した。

◆アンケートの結果（一部）

【悩み】

- ・子どもが何に困っているのか把握できない。
- ・日本語を教えるってどうやって行うのか。
- ・教科に関する理解ができていないけど、どうすればいいか。
- ・母語が大事っていうけれど、どういう意味なのか。 等

【勉強会に期待する内容】

- ・思いや悩みを気軽に話し、共有・解決して行けるとよい。
- ・日本語指導の基本を学びたい（支援方法・どんな手立てがあるか・事例紹介）。
- ・担任としてどうあるべきか、子どもを理解する上で必要なこと。 等

この結果をもとに、E先生と話し合っ「勉強会」の目標を以下のように設定した。

目標① 国際教室と在籍学級の教師が情報・悩みを共有し、外国につながる子どもの学びに活かす 目標② 国際教室の学びと在籍学級の学びに連続性を持たせる連携を目指す 目標③ 日本語教育の知見と子どもの実態から、外国につながる子どもの学びがおきる授業を考える

1回目の「勉強会」では、このアンケートの結果をもとにした話し合いを行った。外国につながる子どもに対して教師が様々な支援を試み、工夫を重ねていることや、悩んでいるのは自分だけではないことが共有された。しかし、「日本語を教える」ことは、今までの教育経験からだけでは対応できないと思っている教師は多く、どのように子どもと関わればよいか悩んでいることが分かった。参加した教師からは「ここ（勉強会）で、いろいろ教えてもらいたい」「日本語指導の基本を学びたい」という意見が出された。「勉強会」の場を「教えてもらう場」と考え、外国につながる子どもに何をどう教えたらいいのか、E先生と筆者（加藤）を、その答えを持っている人と捉えているとも考えられた。

しかし、加配教員であるE先生もまた、一般の教師であり、「勉強会」で共に学んでいく

存在である。筆者（加藤）から、「この「勉強会」は、教師間で互いの悩みや困っていることを出し合いながら、一緒に考えていく場としたい」と伝えた。第1回では、「勉強会」はE先生や筆者（加藤）が「何をどう教えたらいいのかの解答を与える場」ではないことを確認するものとなり、そこから始める必要があったといえる。

3-3 「勉強会」の内容

全10回の「勉強会」の内容を「表1」として示す。1～3期は10回が終了した後に、筆者（加藤）が勉強会のあり方や内容から区分したものである。この区分は緩やかなものであって、期に限定されない内容、例えば、在籍学級との連携の模索や外国につながる子どもについての悩みなど、毎回語られた内容もあった。自由参加であるため、時期によって参加者に変動があったが、参加した教職員はのべ数では70名となり、異なる立場の教職員計17名⁽⁸⁾の参加が見られた。A小学校の全教職員は40名であり、半数近くが参加したことになる。在籍学級担任だけを見ると16名中10名が参加している。

1回目は、前述のようにアンケート結果をもとに教師が日頃感じている悩みや思いを出し合った。2回目以降の内容については、参加した教師間で話し合い、次の回で話題にしたい内容を決める形をとった。教師からあがった内容をもとにE先生と筆者（加藤）で1時間の流れを相談し、E先生が司会進行を担当して進めた。

勉強会の進め方

日 時：月1回 放課後1時間程度（15:45～16:45）

場 所：国際教室

進 行：国際教室担当教員（E先生）

参加者：教職員の中の希望者

勉強会の主な流れ

事前準備：・E先生による教職員への呼びかけ（打ち合わせ時間や校内掲示板を使用）
・E先生と筆者（加藤）による勉強会の進め方の確認（当日の休み時間・給食中・開始前の時間など、その時々で打ち合わせ可能な時間に行う）

《導入》 5分～10分 ・アイスブレイク
(外国につながる子どもと共に活動できるアクティビティ紹介)
・最近の子どもの様子を報告し合う
・教室実践について報告し合う

《展開》 30分～45分 ・今日のテーマについて話し合う

《終末》 5分～10分 ・この回の振り返りを行う
・次回の「勉強会」のテーマを決める

より具体的には、次節において第3回を例に「勉強会」がどのように展開されたかを示す。

表1. 「勉強会」の内容 (月1回 会議等のない金曜日 15:45~16:45)

	勉強会の話題と内容	参加者	
第1回 2017.11.13	・アイスブレイク (来日後間もない子どももできる活動を紹介) ・事前アンケートについて意見交換 ・日常会話と教科で必要な言語とは何か ・カミング理論の表をもとに何ができるかを考える ★学習に必要な言語支援 ※第1回「国際教室だより」発行	8名 ◎○▽	第1期
第2回 2017.12.11	・アイスブレイク (日常会話ではできる子どももできる活動を紹介) ・参加者の実践・外国につながる子どもの様子 ・ことばの学びを支える実践—漢字中心に— ・支援の方法 (インタビュー) ★教科支援方法 ※第2回「国際教室だより」発行	6名 ◎○▽	
第3回 2018.1.26	・アイスブレイク (「漢字バトル」ゲームの紹介) ・最近の子どもの様子 ・教材研究 (JSLカリキュラムの視点)「どうぶつの赤ちゃん」 ★教材研究・ケース会議 (1年) ※第3回「国際教室だより」発行	8名 ◎○□△▽	第2期
第4回 2018.2.2	・アイスブレイク (外国語活動で行うキーワードゲームの紹介) ・教材研究 (JSLカリキュラムの視点)「スーホの白い馬」(2年) ・外国につながる子どもの理解 外国につながる子どもの課題とその背景や支援方法を考える ※第4回「国際教室だより」発行	8名 ◎○□△▽	
2月	・外国につながる子の学びの校内研修会 (外部講師:筆者 (池上)) ※外部で実践報告 (ポスター発表)	全教職員 ◎○▽	第3期
第5回 2018.4.20	・新学期の子どもの様子	2名 ○▽	
第6回 2018.5.25	・今年度の子どもの様子 ・昨年度の取り組み ・リライト教材 ★DLA (外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント) ※第5回&6回「国際教室だより」発行	9名 ◎○▽◇	第3期
第7回 2018.6.29	・DLA とは何か 事例5年Hさん<読む> 事例3年Jさん<はじめの一步><話す> ・DLA の共有 ・実践報告 (3年) ※第7回「国際教室だより」発行	9名 ◎○◇▽▽	
第8回 2018.7.11	・国際学習室と在籍学級が連携した協働授業実践の振り返り ※第8回「国際教室だより」発行	3名 ◎○▽	
8月	・外国につながる子の学びの校内研修会 (外部講師:筆者 (池上))	全教職員	
第9回 2018.9.28	・実践報告 (音楽専科・在籍学級・国際学習室) ・教科で必要な言語は? (算数5年・6年) ・数の数え方 (単位がつく時の言い方) ※第9回「国際教室だより」発行	6名 ◎○☆▽◇	第3期
第10回 2018.11.14	・勉強会の総括 ・持続可能な勉強会にするために ※第10回「国際教室だより」発行	11名 ◎○☆▽◇	
★この回で決めた、次回の勉強会のテーマ 参加者 ◎国際学習室担任, ○在籍学級担任, □特別支援学級担任, ◇学習支援員 ☆音楽専科, △栄養士, ♥日本語指導等協力者 (タガログ語), ▽サポーター (筆者) * =勉強会に参加した教師と「子どもの日本語教育研究会」でポスター発表を行ったもの			

3-4 「勉強会」の具体例

「勉強会」のテーマと内容は様々であったが、第3回を例にして、およそどのような実践であったのかを示してみたい。表2として、活動の主な流れを示した。

表2. 【第3回勉強会／2018年1月26日／単元を決めての教材研究】

テーマ「単元を決めてみんなで教材研究をする」 *第2回「勉強会」で決定	
事前準備 (E先生と)	教材研究をする学年・単元を決める(外国につながる子どもが多く、学年で勉強会に参加している1年生の単元「どうぶつの赤ちゃん」に決定)教科書のコピー、ホワイトボードを用意する。単元の何について話し合うのかねらいを決める。
導入(10分)	最近の子どもの様子、教師が今困っていること等を話す。 アイスブレイクとして「漢字バトル」のアクティビティを紹介する。
展開(45分)	<p>1. 今日のテーマを確認する</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>「どうぶつの赤ちゃん」の単元で、外国につながる子どもはどこで困るのだろうか。この単元で何を大切に授業を展開したいか考えよう。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・教科書のコピーを配布 ・JSLカリキュラムの5つの視点のプリント配布 (2016年の校内研修で配布された資料を活用) <p>2. ペアで考える(図2)</p> <ol style="list-style-type: none"> ①. ペアで自由にホワイトボードに書き込む ②. 国際教室で行う支援として考えられることを赤で加筆する。 <p>3. 話し合ったことを共有する(写真1)</p>
終末(5分)	<p>★次回のテーマを決める</p> <p>→・2年生の教師からの要望として、「スーホの白い馬」のような外国の長編物語の進め方を検討したい、というものが出た。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一人の児童を決め、言動の背景について考えたいという意見もあった。

《導入：「漢字バトル」ゲームの紹介》

どの回においても「導入」の約10分で最近の子どもの様子や悩みを話したり、教師が日頃学級で行っているアクティビティの中で外国につながる子どもと一緒に楽しめるものを紹介し合ったりした。こうした「導入」をアイスブレイクと位置付け、その後の話し合いが起こりやすくなった。第3回の「漢字バトル」は漢字の書き順をゲーム感覚で学んでいくものである。2人1組になり、対象にする漢字を決める。じゃんけんで勝った人が1画ずつ書いていき、先に漢字を完成させた方が勝ちとなる。書き順を遊び感覚で学べるので、「勉強会」で取り上げた後は多くの学級で実際に行われた。

《話し合い：教材研究》

第3回では一つの単元を決め、外国につながる子どもに対してどのような教材を用いてどのような支援を行うとよいか考えた。

はじめに、今回のテーマを確認し、その後ペアになって話し合った。そして、その内容を全体で共有した(写真1)。単元の進め方を複数の視点で考え、他の教師と意見を交わすことによって、教師一人では考えられなかった視点に気づかされる。教師は、自分が今まで経験したことを活用して、目の前にいる子どもを想像しながら、必要な支援を考えていた。難しいことばが出てくる国語科の単元「どうぶつの赤ちゃん」を取り上げたが、例えば、あるペアでは、動物の成長を身近に捉えられるように、自分自身と比べて動物はどのようなかという視点で読み取らせてはどうかと話し合いを進めていた(図2)。また、この回には、栄養士も参加していたが、栄養士は「子どもたちに大きさのイメージを持たせるため、身近にいる子ネコなどと大きさを比べさせたらいいのではないかと述べていた。特別支援学級の担任は、特別支援の子どもが困りそうな視点から、外国につながる子どもにも共通する手立てを伝える等の意見を出していた。このように、ことばに着目する教師、



写真1 第3回「勉強会」；
話し合ったことの共有

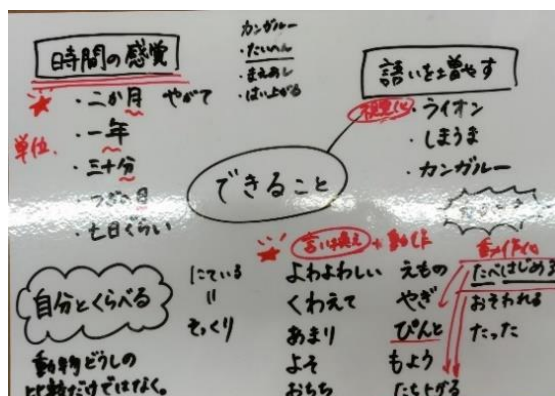


図2 ペアのメモの例

国際教室と在籍学級の役割に関心がある教師，自分と比べながら考えることが大切だという教師，一人ひとりの「言語観・教育観・実践観」によって同じ単元でも捉える視点が異なることが分かる。振り返りの際，栄養士からは，「子どもが身近な存在になった。「食育」の授業をする際，本当に教えたいことは何か，ことばを選んで伝えたい」といった意見が出された。これは，「ことば」に着目して考えている教師と話し合い，共に子どもの学びについて考えて出された意見である。

《終末：次回のテーマを決める》

各回，会の最後の5分ほどを使って，この回のまとめと振り返りを行い，そこから続けて次回はどのようなテーマで話し合いを行いたいかを，意見を出し合って確定した。第3回では教材研究が行われたこともあり，第4回に向けて2年生担任からの「スーホの白い馬」を取り上げたいという意見や，ひとりの子どもに着目した意見交換を行いたいといった要望が出された。

3-5 「勉強会」全体の変化

本節では，全10回の「勉強会」を3期に分け，全体としてどのような変化があったのかを記述してまとめる。

【第1期】「共感する場」

「勉強会」を始めた当初は，教師が日頃感じている外国につながる子どもについての悩みを話す場となっていた。「みんなも同じように悩んでいる」という認識が共有され，教師の安心感につながった。また，日本語教育に関する基本的な知識を得たいという意見が多かったため，日本語教育に関わる理論を筆者（加藤）が紹介し，その理論から外国につながる子どもの学びについて，実際に考えてみた。習得には時間がかかることや母語で学習してきたことが日本語学習に生かされること等を紹介した。

2回目に「スキャフォールディング」という考え方を紹介した際，在籍学級担任のB先生が「これまでやっていたことに名前がつき，意味づけがされ，より意識的な支援できるようになりました」と語った。B先生は，自身が実践してきた支援や手立てが外国につながる子どもにも援用できることが分かり，その実践について話し始めた。それを聞いた他の教師が，「B先生の子どもののかかわり方を聞いたのがすごくよかった」と語ったように，語られた事例は，参加した別の教師の心に残り，子どもへの関わり方を見直すきっかけに

もなっている。国際教室担当教員のE先生は、B先生の事例を校内委員会で全職員に紹介した。「勉強会」に参加していた教師は、外国につながる子どもに対する教育に、教師としてこれまで培ってきた支援の仕方が活かせると感じ始めていた。

【第2期】「共に考える場」

第2期では、教科のある単元を一つ取り上げて教師間で支援方法を考えたり(3-4 参照)、ひとりの子どもの成長とことばの関係について話し合ったりした。目の前にいる子どもを思い浮かべながら対話し、どのような「ことばの教育」ができるかを考えた。第2期は教師にとって「勉強会」は、ひとりの子どもにとっての学びを具体的に「共に考える」場となった。以下は、第2期目終了時点(2017年度末)で出された教員の感想の一部である。

- ・自分のクラスの児童を取り上げてもらえたことで、その子の今の状態を見つめ直す機会になった【在籍学級担当】
- ・文化背景なのかことばの問題なのか見極めが必要だと思った【特別支援学級担当】
- ・単元を通して、在籍学級と一緒に単元の全体を見通して担任と話し合う時間が取れたことがうれしい【国際教室担当教員のE先生】

【第3期】「一人ひとりのための場」

新年度(2018年度)に入り、前年度から「勉強会」に参加していた教師が、同学年担当になった他の教師に声をかけるなどして、新たなメンバーも加わった。この頃になると、「勉強会」の位置づけは教師によって異なりを見せる。自分の仕事と折り合いを付けながら、参加が可能なときに自由に参加する教師も見られるようになった。「勉強会」で話される内容は、教師自らの授業実践や教材開発、外国につながる子どものことばの力の捉え方などに及び、担任する「その子」にとっての学びを考えるなど、子どもの実態に合わせた対話が起きるようになってきた。以下は第3期に話題として取り上げた実践で、参加した教師が実際に教室で行っていたものである(表3)。また、「勉強会」の場で、参加した教師が共に考えた実践もあげておく(表4)。

表3. 教師が教室で行った実践

	実践	目的	目標
第6回	【実践報告】1年国語「どうぶつの赤ちゃん」	国際教室と協働する	学びの連続性をつくる
	【リライト教材】3年「キツツキの商売」★	宿題音読用	自力で読めるようになる
第7回	【リライト教材】3年「ことばあそび」	学級全体用(希望者)	「読む」抵抗感を減らす
	【リライト教材】3年「こまを楽しむ」	学級全体用(希望者)	内容理解を促す
第8回	【実践報告】3年「気になる記号」	JSL児童の背景を活用する	内容に興味を持たせる
第9回	【実践報告】音楽「鑑賞」とグループ合奏	分かる言語(英語)を活用する	複言語視点を持つ
	【実践報告】2年「しかけあそび」	学びを行事につなげる	文脈に学びを埋め込む
	【実践報告】3年「話し合い活動」	国際教室で学び合う	友だちと関わりを持つ

(筆者(加藤)による実践報告★)

表4. 教師が「勉強会」で共に考えた実践

	実践	目的	目標
第7回	【DLA】<話す><読む> ★	複数視点でことばの力を捉える	子どものことばの力を把握する
第9回	【教材研究】算数「押さえる学習用語」	高学年の教科用語を押さえる	教科学習を支援する

(筆者(加藤)がアセスメントを行い「勉強会」で評価★)

10 回目はこれまでの「勉強会」の総括として話し合いを行った。音楽専科の教師は、教師の「ちょっとした工夫」により、子どもの活動の幅を広げられたという。また、2018 年度に外国につながる子どもの担任になった D 先生は、新たに勉強会に参加し、何度か実践報告をしている。D 先生は、いろいろ試行しても満足のいく成果は得られなかったと語った。しかし、今できることを試行し検討を続け、最後に「大事だなあと思ったことは、その子の困り感を模索したり、困り感に寄り添ったりすることは、自分の新しい意識として一つ芽生えてきたこと」と語った。

「勉強会」は次第に変容しながらも、参加した教師たちそれぞれにとって、外国につながる子どもたちに関する学びを考える場となっていた。B 先生は、最後の回に「ここでいろいろな方法を知ったり、皆さんのいろいろな取り組みを聞いたりすることは勉強になりました。ここで『うまくいった』とか『うまくいかなかった』とか共有することは、これから出会う子どもにつながるんだなあということと、ここで学んだことを次に生かせることは、この勉強会に参加してよかったことです」(第 10 回勉強会での発言)と振り返る。

次章では、「勉強会」に参加する中で教師はどのように意識を変容させていったのか、1 年間の記録から検討を行う。それを通して、「勉強会」の成果と意義について考えてみたい。

4. 「勉強会」への参加によって教師の意識はどのように変容したか

本章では、「勉強会」を行った結果、教師にどのような「気づき」があり、教師の意識にどのような変化が起きたのか、参加した教師へのインタビュー⁹⁾で語られたこととともに紹介する。4-1 では、「国際教室だより」から見える国際教室担当教員の意識の変化を、4-2 では、「勉強会」に参加した教師が教室で行った実践を、最後に 4-3 で、教師の意識変容を促すために筆者らが行った働きかけについて述べる。

4-1 「国際教室だより」に見られる意識の変化

毎回の「勉強会」の後には、そこで話し合われた内容を教職員全体に広げるため、E 先生によって「国際教室だより」が発行された。「勉強会」を持続可能な学び合いの場として校内に位置づけることは、常に時間に追われている学校現場において容易ではない。E 先生は教職員が日々多忙になっていることを知りながら、それでも同僚たちに声をかけ続けた。「国際教室だより」を発行することで、「勉強会」で行われた内容を学校全体に広げる努力をした。多忙な教師に配慮し、「国際教室だより」は、A4 に簡潔にまとめられている。「外国につながる子どものことを校内の教職員と一緒に考えていきたい」(2017 年 3 月インタビュー)という E 先生の思いと力によるところが大きい。

本節では、この「国際教室だより」の内容を通して、E 先生が何を考え、何を伝えようとしていたのかを見ていく。以下は「国際教室だより」の内容の一覧である(表 5)。

表 5. 「国際教室だより」内容一覧

	回	発行月	主な内容
第 1 期	1	2017. 11	アンケート結果より、カミンズの理論紹介
	2	2017. 12	子どもの様子、ことばの学びを支える支援
第 2 期	3	2018. 1.	教材研究「どうぶつの赤ちゃん」、欠かせないことば、連携のあり方、教師の発話と「やさしい日本語」
	4	2018. 2.	教材研究「スーホの白い馬」、教材研究を通じた国際教室との連携
第 3 期	5	2018. 5.	少人数での意見交換、「子どもの何気ないつぶやきを見逃さない」
	6	2018. 5.	新年度の子どもたちの様子、実践報告、音読の支援
	7	2018. 7	DLA (JSL 児童のための対話型アセスメント) について
	8	2018. 9.	3 年生、国際教室との連携授業の振り返り
	9	2018. 11.	算数のことば、外国につながる子どもたちに関する実践について
	10	2018. 12.	勉強会の総括、参加者の声

【第1期】

E先生が「国際教室だより」を発行するに至った背景を、インタビューでの語りから考えてみたい。「勉強会」開始当初、「国際教室担当という立場は、外国につながる子どもの学びについての知識を持ち合わせていなければならない」という固定概念をもっていた。

【勉強会開始当初のE先生】

「勉強会」をやってみて、まず私（E先生）が勉強しなくてはいけないなって。「勉強会」をやってみようっていうのを、回を重ねる中で自分（E先生）が伝えなきゃとか、教えられることはないんですけど、そんなふうに構えなくてもよかったんだって思った。でも、最初はやっぱり、「勉強会やりますよ」なんて言ったら、やっぱりなんか「何がEさんにできるの」って、そういうところがみなさんあるかなって思って心配だったかな。
(2018年3月；インタビュー)

しかし、その意識は「勉強会」で対話を重ねながら、「学校の一人の教師として、仲間の教職員と一緒に外国につながる子どものことを考えていこう」と変化した。国際教室担当教員とはいえ、他の教師と同様で日本語教育を専門的に学んできたわけではない。外国につながる子どもの「ことばの教育」とは何かを、手探り状態から「勉強会」という場で同僚と共に考え、自ら教育実践を行い、実践と省察を繰り返す中で、「ことばの教育」とは何か問い続けた。E先生は、「国際教室だより」を媒介に「勉強会」での学びや気づきをA小学校の全教職員と共有しようとした。

「勉強会」で異なる立場の教職員と対話する中で、E先生は同僚教師たちが外国につながる子どもに向けて行っている支援や手立てを知り、その中から全教職員と共有したいと考えた内容を「国際教室だより」で発信した。状況が伝わるように手順を追って具体的に、読者である先生方にイメージが伝わるように工夫して書かれている。第2回の「国際教室だより」では、宿題の難易度を上げていく手立て、子どもによって支援方法を変えている例、音読しやすくするための工夫などを発信している。

【第2回 国際教室だより】

●参加者のみなさんより

- 同じ時期に来日していても、日本語の習得に大きな差がある。個に応じた手立てをとっている。
宿題は、段階的に難易度をあげて出す。【なぞる→見て写す→選んで写す】
提出の習慣を付ける。
- 子どもの性格により支援方法も違う。
例) 人との関わりが好きな児童は複数での学習で刺激を受けることでやる気アップ。
1対1対応を望む児童もいる。
- 音読の文章に文節ごとにスラッシュを入れる。→区切りが分かり読みやすくなる
(一部抜粋)

このように第1期は、「国際教室だより」で、参加した教師の支援や対応の方法を紹介することで、参加していない同僚教師にも自らの授業を振り返り、外国につながる子どものことを考えてもらう機会をつくらうとしていた。

【第2期】・【第3期】

第2期には、在籍学級と国際教室の連携のあり方（第3回，第4回），第3期には、子ども一人ひとりに着目して、子どもの母語（第7回，第10回）や分かることばを活用したグループ活動（第9回）などが記され，参加した教師が次第に「勉強会」での気づきを教室の実践に活かしていくようになったことを報告している。単に日本語を教えるだけではなく，子どもが主体的に学べる学習環境を整えていくことが子どもの学びの幅を大きく広げるといった内容が「勉強会」で語られ始め，それを発信している（第5回，第8回）。さらに，教師の少しの工夫と配慮によって，外国につながる子どもが本来持っている力を引き出した実践を具体的な手順と共に伝えている（第6回，第8回，第9回）。

「第6回 国際教室だより」には，在籍学級と国際教室でどのように連携を行ってきたのかが示されている。E先生は1年の国語科単元「どうぶつの赤ちゃん」での連携授業（3-4参照）をきっかけに，2年の国語科単元「スーホの白い馬」，3年の国語科単元「気になる記号」でも学年の教師と連携して，在籍学級と国際教室の役割を明確にしながら単元を進めた。そして，学年の先生と連携して授業を行う中で，E先生は，子どもや教師が変化していく姿を目の当たりにする。「子どもとかかわるところだけじゃなく，周りの環境とか大人の意識とか，やはり大事なことだと思いました」（2018年8月インタビューより）と語る。

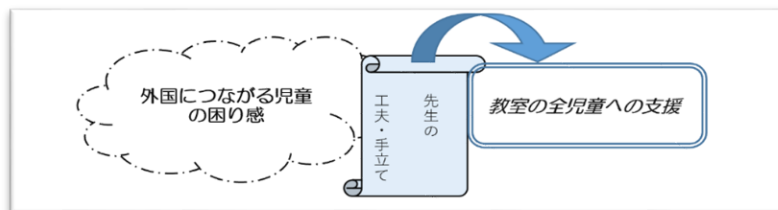
E先生は次第に，子どもへの支援と同様，教職員の意識に働きかけることも重要視するようになる。さらに，学校内にとどまらず，外国につながる子どもにかかわる人たちとのネットワークを広げていく。そこで情報を得，外国につながる子どもの将来を見据えるという教師としての役割の重要性を感じ始めている。

【第6回 国際教室だより】

●昨年度の実践より 1年説明文「どうぶつの赤ちゃん」

昨年度，1年生の担任と単元を通した連携に取り組みました。学習計画の中で，「〇時間目に，国際ではここをやる」というように，国際教室での「先取り学習」を位置づけて，時間を調整しながら行いました。クラスでは，テレビを使った視覚支援や，言葉を意識した授業をすることで，国際教室の児童も無理なく意欲的に「書く」活動に取り組みました。また，「国際教室の児童を意識した支援は，教室全体の児童の支援につながる「ユニバーサルデザイン」⁽¹⁰⁾を作っていた」という考察が得られました。

（一部抜粋）



年度が替わった頃から，E先生は自身から，他の教職員に対して伝えたい思いを発信していくようになる。そこには，「勉強会」開始当初のような「私がやっても…」という不安はなく，「私がやらなくては」という意識が芽生えている。10回目の「勉強会」が終わった際には，「国際教室だより」に参加教師の声も載せている。2-1でも示したように，日本の学校に通う外国につながる子どもは増加の一途をたどる。この第10回の「国際教室だより」は，すべての教師にむけての国際教室の担当者からのメッセージであるといえよう。

【第10回 国際教室だより】

約1年間、合計10回も外国につながる子どもたち、国際教室の子どもたちについて考える時間をとることができました。毎日忙しく、それぞれがやるべきことがたくさんある中で、このような時間を作ることができたこと、また多くの先生方に参加していただいたことは本当に嬉しく、感謝の気持ちでいっぱいです。外国につながる子どもの生活面だけでなく、学習面について様々な話題や単元について話し合えたことも、お互いの学びにつながりました。また、皆さんのお話を聞いていると普通の授業の中で外国につながる子どもを意識することが増えたのだとわかりました。国際教室担当者としては、本当にありがたいことです(^^)

出入国管理法が改正され、これから外国人、外国につながる児童は増えていくといわれています。**外国人は勝手に日本にきているのではなく、日本が国としてその方たちを求めているということだともいえます。**いずれ、ますます多くの外国につながる子どもたちが日本の学校に通うでしょう。私たちも新しい見方、考え方、指導方法を見つけていく必要があるのかもしれない。

私たちは日本語教師ではありませんが、**教室に日本語に課題を持ちながら授業を受けている子どもがいることを意識するだけで、やさしい言葉で話したり、視覚的な支援をしたりできると思います。**これは、どの子どもたちにとってもわかりやすい授業(UD(ユニバーサルデザイン))につながると、勉強会でも話題になりました。**目の前の子どものために、少しの配慮や工夫を日々少しずつやっていけるといいなと思います。Eより**

(一部抜粋)

以上、「国際教室だより」を通して、E先生の意識の変容を追ってきた。最後に、E先生が筆者(加藤)に語った、「今の自分の思い」を以下に紹介しておく。

最近、子どもたちへの私(E先生)の見方が変わってきた。子どもたちに私だけが一人でやってもあんまり変わらないし、変わる部分が限られている。というか、広がらない。やっぱり勉強会で伝えたり、みなさんにアナウンスしたりする中で自分が自ら行動したり、いろんな人とつながったりすることによって、私自身すごい変わったと思う。—中略— 国際教室を持たせてもらって思ったのは、親御さん、家族ってすごく大事だなとも思って。今まで子どもだけを見ていたけど、すごく周りの家族とか、母国にはまた家族がいてとか、すごく広ーい、見えない部分がいっぱいあるんだなって。担任だけをしていたら、なかなか見えないっていうか。今は踏み込んでいくのが、おもしろいなって。

(2019年5月;インタビュー)

4-2 勉強会に参加した教師の意識の変化

4-2では、「勉強会」に参加した教師が、勉強会でどのような「気づき」を得、教室でどのような実践を行ったのか、具体的な事例を示す。

①国際教室と連携し学年で子どもを見る取り組み

第1学年の国語科単元「どうぶつの赤ちゃん」の教材研究(3・4参照)がきっかけとなり、「どうぶつの赤ちゃん」を題材に、1年の担任と国際教室と一緒に学習計画を立てることとなった。1年の主任であるG先生から国際教室担当教員であるE先生に連携して実践を行おうと提案があったことによる。1年の担任が中心となり、学年全体で外国につながる子どもの学びを中心にした授業作りに取り組んだ。単元を通して学年の教師と共に授業を設計できたこと、学年主任が学年の課題として率先して動いたことの効果は大きい。これ

らは、「勉強会」で教材研究をしなければ生まれなかったことである。在籍学級の教師と国際教室の教師が共に授業を作り、子どもの学びをつなぐことで、子どもは安心して学びに向き合うようになった。1年の担任は「勉強会」をきっかけに行った授業実践によって、外国につながる子どもの表情が一変したとインタビューで述べている。外国につながる子どもの言動に目が向くようになったことが大きな要因であろう。学年主任は「子どもたちのやる気に満ちた気持ちに救われた」と語る。別の1年の担任は「自分だけでは気づかなかった児童のつまづきや解決策と一緒に考えることができた」と連携の成果を語る。

単元を通して、在籍学級での目標と国際教室での目標を明確にしたこと、見通しをもって取り組めたこと、そして、何より教師同士がつながっていることが、外国につながる子どもに安心感をもたらし、学ぶ意欲を引き出したと考える。

② 子どもの成長を見守り「自分のことば」で話すまで待つ姿勢

C先生は、担当する外国につながる子どもが高学年になり、ことばの問題で友だちとトラブルを起こさないかと心配して、第4回の「勉強会」で相談をした。自分のクラスの子どもを取り上げてもらえたことで、その子の今の状態を見つめ直す機会となったという。

子どもの観察を続けたC先生は「クラスの周りの子どもとのかかわりを大切にしていきたい」と「勉強会」で語った。国際教室にDLAの「読み」のアセスメントを依頼し、勉強会では参加教員とともに評価活動を行った。そこでは、「アウトプット（音読）ができないだけで内容は理解している」ことを知る。友だちとことばの問題からトラブルになった時も、「自分でそうしなくなかったのに、やっぱり言っちゃうんだなってことがあるんだと改めて感じた」と語る。C先生は、外国につながる子どものことばからだけで判断するのではなく、なぜそのようなことばが出たのか、その背後にある子どもの気持ちを聞こうとした。「自分で言いたいんだったら、自分から言ってほしい。こちらから選択肢を出して『これで合ってる？違ったら違ったらって言ってね』と聞く子もいるけど、でも、（その子は）なんかそうじゃないと勝手に思って」（2018年8月のインタビューより）と語る。子どもが自分のことばで話すまでの間、口を出さずに待った。外国につながる子どもが内面に豊かな感情をもっていることをDLAの結果から感じ取り、「自分のことば」で表現する力を信じて見守った。その結果、子どもがC先生のところに相談に来る回数が増えたという。「なんて言えば言いかね」と何度も言いながら相談に来る。子どもは自分の声を聞いていてくれる存在に「自分のことば」で伝える経験を重ね、自信を持ち始めた。

この他にも、3年担任のD先生は、外国につながる子どもの自ら学ぶ意欲を高めるためにリライト教材及び自作教材を作成した。第6回「勉強会」でリライト教材を知ると（表3参照）、翌週には自分でリライト教科書を作り、筆者（加藤）にアドバイスを求めてきた。第7回「勉強会」でリライト教材を使った手ごたえを話し、より良いものを目指して、参加した教師の意見を受けて次の単元もリライト教材を作った。「読むようになったが理解できているのか」という気づきから、外国につながる子どもの興味を引く内容を考えて自作教材も作成した。国際教室と連携した活動案を作り、それぞれの教室の役割を明確にして授業を進めていった。このように、教師たちは「勉強会」での対話や子どもの反応から、試行錯誤を続けていった。

4-3 筆者らの働きかけ

「勉強会」から出された話題を受け、筆者らは子どもの実態や教師の関心に留意しながら、外国につながる子どものことばの教育を教師と共に考えてきた。ここでは、筆者らそれぞれが、教師の意識変容を促すためにどのような実践をしてきたのかを述べる。

筆者（加藤）は、A小学校において、サポーターという立場で外国につながる子どもの「取り出し指導」「入り込み指導」を週1回行ってきた。「取り出し指導」では、子どもの実態に合わせて、子どもが自力で音読の宿題ができるようにリライト教材を作成し、「勉強会」で紹介した（表3の★）。また、在籍学級の教材を入手し、子どもの実態に合わせて平易な日本語に直してイラストをつけて使用した。授業では、ペア学習を積極的に取り入れ、友だち同士のかかわりの中でことばを使う場面を設定してきた。E先生と何度もT.T授業を行い、放課後には2人で授業の振り返りを行った。「入り込み指導」では、在籍学級での子どもの様子や教師の発問を記録し、外国につながる子どもはどんな時に困っているのか、記録をもとに在籍学級、国際教室の担任と振り返りを行った。第8回「勉強会」では、3年生の国語科単元「気になる記号」を材料にE先生と在籍学級担任と連携のあり方について話し合った。さらに、教師たちに呼びかけ、賛同した4名の教師と共に外部の研究会で「勉強会」をテーマにポスター発表を行った。研究会では「勉強会」の実践に多くの方々から関心が寄せられ、同時に、他の方々の実践を知った。こうしたことは、その後の校内の勉強会にも活かされ、実践にも影響を与えている。

2-3で触れたように、A学校では全教職員対象の校内研修に外部講師を招聘することがあるが、2017年度末と2018年度の夏休みの2回、講師を務めたのが筆者（池上）である。内容としては、研修で学びたいことについて教頭から教職員に聞き取りが行われ、筆者（池上）に伝えられた。第4回と第8回の「勉強会」の振り返りでも、筆者（池上）に聞きたいことを出し合い、目標③の「日本語教育の知見と子どもの実態から、外国につながる子どもの学びがおきる授業を考える」を念頭に研修内容(Ⅳ)を設定した。研修の前半は講義、後半はワークショップや教師の日頃の悩みを相談する時間とした。研修後には多くの教員と、日頃困っていることなどを話し合った。

5. 実践の成果

5-1 3つの目標に沿った検討

「勉強会」の3つの目標が達成できたのかどうか、以下、目標ごとに見ていく。

目標①「国際教室と在籍学級の教師が情報・悩みを共有し、外国につながる子どもの学びに活かす」

3-5で述べたように、「勉強会」を通して「みんなも同じように悩んでいる」という認識が教師間で共有された。他の教師がどのように子どもとかかわってきたのか、失敗談も含めて聞くことができた。そして、悩みだけでなく、自分の体験や「勉強会」後に教室でどのような取り組みをしたのか、その時の子どもの様子はどうだったのかも話し始めた。また、外国につながる子どものことを考えた実践を行っている教師に対しては、筆者（加藤）や国際教室担当教員のE先生から、「勉強会」で実践報告をしてほしいと依頼することもあった。さらに、目標③とも関連してくるが、教師同士では解決できない悩みや日本語教育

の知見については、筆者（加藤）が大学院で学び得た情報を提供したり、筆者（池上）がA小学校の校内研修の講義で取り上げたりした。10回の勉強会を通して明らかになったことは、教師もまた他の教師とつながり、話し合い、一緒に考えることを求めているということである。3-5で紹介したB先生の語りにも見られるように、今だけを見るのではなく、これから会う子どもたちにどのような学びの場をつくれればよいのかを考える場となったと言える。「ここで学んだことを次に生かせることは、この勉強会に参加してよかったこと」という語りから、教師一人ひとりが勉強会という場での学びを「自分事」として捉え、これからの教育活動に活かしていこうとしていることがわかるのではないだろうか。

目標②「国際教室の学びと在籍学級の学びに連続性を持たせる連携を目指す」

「勉強会」では、外国につながる子どものことばに焦点を当てて、その支援方法や手立てを考えることに多くの時間を充てた。3-3にあるように、勉強会にはA小学校の異なる立場の教職員17名が参加した。16名いる在籍学級担任からは10名、半数以上の参加を見た。在籍学級の担任も、学級に在籍する外国につながる子どものことを学びたいと考え、国際教室と連携して子どもを見ていくことの必要性も感じているのである。一人で課題に取り組んできた教師にとって、「ことばの教育」に焦点を当てた学びの場が身近にあるということは大きな助けになる。「こういう場がなければ、まったくもって（外国につながる子どものことばに）意識はしなかった」（第10回勉強会、在籍学級担任）という内容からも伝わってくる。第7回「勉強会」には、前年度まで参加していなかった教員4名が加わった。外国につながる子どもの担任をすることになったからである。年度が変わってから参加したある教師は、10回目の勉強会で「去年までは他人事だったけど、やっとなんかここにきて（外国につながる子どものことばの教育に）必要感を感じて。参加するといろんなことが身になる。今度は、わかったことをどう活かせるんだろう。それを考える場になればいい」と語った。国際教室との連携を学年で取り組んだ1年生の教師。人とのやりとりのなかでことばを獲得することを実感した教師。学校全体の教職員が複数の視点から子どもの学びを支えることで、子どもの意欲や学びが繋がると考える教師。教師たちは、国際教室の学びと在籍学級の学びを分断して考えないことによって、子どもが安心して学べることに気づいたのである。

目標③「日本語教育の知見と子どもの実態から、外国につながる子どもの学びがおきる授業を考える」

「国際教室だより」内容一覧4-3で述べたように、筆者らが外部から関わることで、教師は教師経験からだけでは気づかない視点を知ることになった。同時に、A小学校の教師らとかかわる中で筆者（加藤）が学んだことは、その学校の教師や児童の実態を把握しながら共に考えていく姿勢が不可欠であることであつた。外国につながる子どもを初めて担任することになった教師が、第7回「勉強会」に参加し、「日本語については分からないので、国際教室でできるだけ多く取り出し指導をして日本語の力を伸ばしてほしい」といった要望を述べた。それに対して筆者（加藤）は、まず自分ができていることを考えてほしいと指摘した。しかし、他の教師は「私も最初はそう思っていたんだよ。でも実際はちがうって」とその教師の意見に共感しつつ一緒に考えようと声をかけていた。E先生もまた、教師た

ちに寄り添い、一緒に考えていこうと伝え続けていた。このことは、筆者（加藤）にとって、日本語教育に関わる者がどのような態度で現場の教師と関わっていけばよいのか、その関わり方を学ぶ機会となった。結果として、「国際教室で」と語ったその教師は、10回目の勉強会では「自分に一体何ができるだろうか。でも本当に心配している」と語った。日々、子どもと接しているうちに、同僚教師からの声かけもあって、認識と気持ちが徐々に変化したのではないだろうか。

学習指導要領改訂に伴い、日本語教育の専門家の参加と協力の必要性が叫ばれている中、日本語教育の専門性をもつ者が現場に入り、共に考えることの効果は大きい。しかし、より大切なことは、まずは教師が自分事としての問題意識を持ち、学ぼうとする意識を持つことであろう。同僚教師と語り合い、他の教師の実践や考え方に触れる。そして、そこで得た気づきを教室に持ち帰り、実践を重ねていく。自分たちでは解決できない問題が出れば、筆者らに相談したり外部の研究会に参加したりする。3つの目標は、教師が「ことばの教育とは何か」を問い続け、自ら行動することで達成されていったのではないだろうか。

5-2 「勉強会」の意義

実践としての「勉強会」にはどのような意義があったのだろうか。「勉強会」は外国につながる子どもに関する悩みや迷いを「共有、共感する場」であり、また、外国につながる子どもの学びを「共に考える場」にもなった。さらに、異なる立場の教師が、外国につながる子どもを「学校の子ども」と捉え、一人ひとりのために対話を重ねる場としてもあった。異なる立場の教師の中には、異なる学年を担当する教師や、外国につながる子どもの担任経験の長い教師、新任の教師もいる。教師だけではなく、職員もいる。「勉強会」には様々な立場や経験をもつ「同僚」が集まっていた。同じ学校の教師同士が学び合うよさは、対話の中心に子どもを置くことができ、全員が見知っている子どもの学びを共に考えられることである。「あの子」の顔を浮かべながら「あの子」について語れることは、学校内にある学び合いの場の最大の魅力であり、その子に応じたより具体的な対話が発展する。そこにこそ、異なる立場の教師が共に学ぶ「勉強会」の意義があるのではないだろうか。

「勉強会」を立ち上げ、子どもの「ことばの教育」を中心においた同僚教師との対話を作ることによって、一人ひとりの教師に次の実践への意欲と内省を促すことができたと考ええる。E先生を例に考えてみると、当初、E先生にとって「勉強会」は筆者（加藤）に声をかけられて始めたものだった。筆者（加藤）が初めて国際教室の担任になったときにように、自分が学びたい気持ちの方が強かった。かつ、「私なんか言っても…」と不安をのぞかせていた。しかし、「勉強会」を実施し、その様子を「国際教室だより」で伝え、授業実践を重ねていくなかで、「そんなに構えなくても、先生方と一緒に考えていけばよい」と意識を変化させ、「国際教室だより」にも少しずつ国際教室担当教員として長期的な視野に立ったメッセージを載せるようになった。

「勉強会」に参加した教師は、勉強会で得た「気づき」を教室に持ち帰る。そして、目の前にいる子どものことを考えた実践を行い、内省する。「勉強会—行動—内省」を繰り返しながら、外国につながる子どもに対する教師自身の言語観・教育観・実践観などを拡張していった（図3）。目の前にいる子どもを考えて実践を重ねることができたからこそ、外国につながる子どものことばを捉える教師の意識に変化が見られたのではないだろうか。

石井(2000)は、現場での教育実践に基づく「ボトムアップ研修」を提唱している(p.12)。「教師が自らの授業を言語活動の観点から分析的に見ること自体が有効な研修であり」(pp.11-12)、「授業の検討から授業改善へつなげる活動を実際の教育を基盤にした自己研修あるいは教師間の相互研修と位置づけ、ボトムアップ研修のあり方を検討していくべき」と訴える(p.12)。「勉強会」もまたこうしたボトムアップ研修であるといえるだろう。

「勉強会」という場合は、教師にとっても子どもにとっても、安心感をもたらす学びを起す働きをしていた。それには対話が必要不可欠であったが、対話を起す大きな要素の一つは子どもへの愛情だと考える。愛情を持ち、子どものことを理解しようと努める教師は、他者との関係の中で気づき、自ら学び、実践を創り上げ、成長することができる。

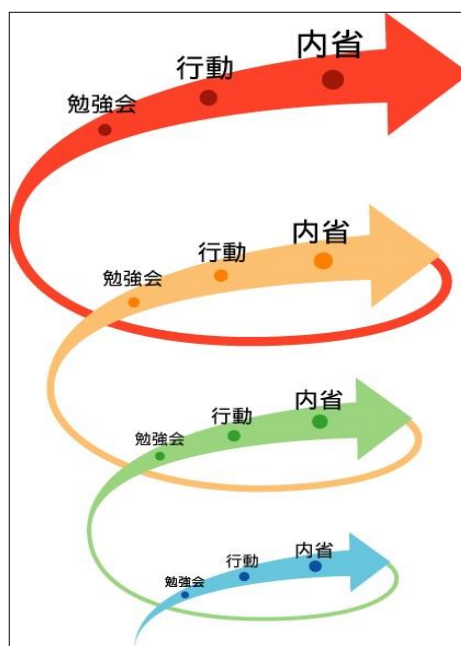


図3 教師の意識変容のプロセス

5-3 国際教室担当教師の学内外でのネットワークの構築

国際教室とは「外国につながる子どもが教師と日本語を学ぶ場」といえる。しかし、A小学校の国際教室には、外国につながる子どもだけでなく多様な子どもが出入りしている。許可を得て、休み時間を国際教室で過ごす子どももいる。何かに困ったときに、わざわざE先生と話をしに来る子どももいる。清掃の時間には3年生が国際教室を担当し、自分たちと同じように外国につながる子どもも国際教室で学んでいることを知る。

また、E先生自身も子どもを取り囲む環境を把握しようと努める。地域の日本語教室、子どもや家庭を支援する公共の施設、そして保育園の先生方とも連携している。例えば、入学前の保護者を対象としたプレスクールで学校の様子を知らせるなど、校種の枠を超えたつながりは、外国につながる子どもの将来を見据えた包括的教育ともいえるだろう。「勉強会」や実践を重ね、さらには様々な場に自ら出向いたことで、外国につながる子どもの教育に対するE先生の捉え方は変化していった。

国際教室担当2年目に入ると、自らの学びの場として校外にも目を向け始めた。他市の日本語教室担当者と一緒に教材を考えたり、市の国際教室担当間のメーリングリストを作成したり、大学の研修会に参加したりするなど積極的に学びの幅を広げている。このような実践が認められ、2019年度に入るとE先生は、学校現場だけでなく教育行政の方からも意見を求められるようになってきている。

今後、外国につながる子どもを中心に、子どもや教師、保護者や地域の方々をつなげるために「国際教室」を機能させていければ、さらに学びが広がっていくであろう。外国につながる子どもとだけではなく、子どもとかかわる周りの人ともつながろうとするE先生の思いは、外国につながる子どもはもちろん、日本の子どもたち、同僚教師、保護者、地域の支援者にも伝わり、社会で子どもを育てていこうという雰囲気を作り出していると思われる。4-1の終わりに示した語りからも、E先生の思いが伝わるであろう。

6. 今後の課題と展望

今後の課題としては、どのようにすれば一人でも多くの教師に外国につながる子どものことばに関して意識的になってもらえるか、ということが挙げられる。それは、外国につながる子どもだけではなく、ことばに課題を抱える全ての子どもたちの教育にもつながっていく。また、外国につながる子どもで低学年では学習面において気にならなかった子どもが、学年が上がるにつれ、学習内容が理解できているのかが不明確になるという課題がある。本稿ではこの点には言及できていないが、今後ますます外国人の定住化が進めば、キャリア教育、生涯学習とも合わせて、かれらの未来を見通した学びの探求が必要になる。これらに対応することも今後の課題とする。

さらに、引継ぎの問題がある。E先生は「国際教室の引継ぎだけして一人でやっていたら、「勉強会」を一人でやっていたら、どうにでもなるっていうか、やらないまま、ただ「取り出し指導」だけをしていたかも」と語る。その上で、「私は私なりのやり方で保護者とつながったり学校でみんなに声をかけたりしてきたけど、それってシステム化されてなくて、人によるっていうか、だれでもできるやり方ではないと感じていて、そうなった時に誰でもできるような体制とか分掌の中のシステムだとか今年はやりたいなって、次につながっていききたい」と語っている。引継ぎの体制をどのように作っていけばよいかを示すことも今後の課題としたい。

本実践は2018年11月までの10回を予定して実施した。これが、筆者(加藤)がサポーターとして関われる期間であったからである。したがって、「勉強会」の実践は継続を目的にするのではなく、その現場のやり方でその現場の教師が外国につながる子どもの学びを考えていけるようになることに焦点を置いた実践となっている。「勉強会」に参加していた教師の半数近くは他校へ異動した。しかし、「勉強会」を経て、教師らは自ら考え、できる形で工夫を続けている。E先生は現在、同僚教師や地域に積極的ににかかわり続けている。他校に異動した教師も、新しい学校で自分の学級で、できることから始めているという話も聞いている。全10回の「勉強会」を通して、それまでと違う視点を持つようになった教師は、以降、外国につながる子どもの学びについて共に考える同僚を見つけ、子どもの学びを考える時間を作っていけることだろう。

【注】

- (1) 属性や国籍に関わらず、多様な言語的文化的背景の中で育ってきた子どもをいう。
- (2) 本稿では、学校教育現場で子どもに教える「教師」と、身分や集団を指す「教員」を分けて使用する。
- (3) 筆者らは、外国につながる子どもたちに対しては、自らのもつ多様な知識や経験をもとに、自らの将来の生活に関する課題を積極的に考えられるようになることを目的とした教育実践活動が必要であると考えている。本稿では、体系をもった「言語」より広い意味での「ことば」を用いて、こうした活動を「ことばの教育」と定義している。より詳細には、池上(2017)を参照されたい。
- (4) 法務省ホームページ
www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00076.html
(2019年9月27日アクセス)
- (5) 在籍教室から児童を取りだし、別の場所で日本語指導を行う教室。地域によって、「日本語教室」「日本語学級」といった呼称もある。

- (6) 2017年度、2018年度には筆者（池上）が講師を担当した。
- (7) 「外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業」
(2017-2019)
- (8) 内訳は、国際教室担当教員1名（E先生）、在籍学級担任10名、音楽専科教師1名、少人数指導教師1名、特別支援学級担任2名、栄養士1名、日本語指導等協力者1名である。
- (9) 参加教師の承諾を得た上で半構造化インタビューを、「勉強会」期間中に2回行った。
①2017年度終了時の3月に国際教室にて。②2018年度夏休みの8月に国際教室にて在籍学級担任を対象に、教育会館個室にて国際教室担当教員を対象に。また、2019年度に勉強会の振り返りとして、国際教室担当教員対象に1回行った（2019年5月に国際教室にて）。インタビューは録音し、文字化資料とした。なお、本稿で示されたデータは、インタビューのスク립ト、写真、活動案、「国際教室だより」の全てにおいて、関係者にはデータ使用についての説明を行い、公開に関する承諾を得ている。
- (10) ユニバーサルデザインとは、本来、多様な差異がある多様なだれでもが使いやすいデザインといった意味で用いられる。学校教育では「個に応じた支援」という文脈で特別支援教育の枠組みから述べられることが多い。ここでは、外国につながる子どものために考えた授業デザインや支援は、外国につながる子どもだけでなく、教室で学ぶすべての子どもの学びの支援にもつながることを示唆している。
- (11) 2017年度は「外国につながる児童生徒に対する指導の工夫について考えるー日本語と教科学習についてー」、2018年度は「児童の多様な背景を考慮した授業活動作りのためにー漢字・語彙学習を切り口にー」として実施した。

【引用文献】

- (1) 池上摩希子（2017）「国際化の中で学力を捉える」『児童心理』1035, 75-79.
- (2) 石井恵理子（2000）「外国人児童生徒に対する教育の充実に向けた教師研修の課題」『教育と情報』509, 8-13.
- (3) 齋藤ひろみ・菅原雅枝（2018）「学校教員の意識変容を促す日本語指導研修ー参加者の期待とビリーフの調査からー」『2018年度日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会, 321-326.
- (4) 法務省（2018）「出入国管理及び難民認定法及び法務省設置法の一部を改正する法律案」
http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri05_00017.html（2019年9月27日アクセス）
- (5) 文部科学省（2018）「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査(平成30年度)」の結果について
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/09/_icsFiles/afieldfile/2019/09/27/1421569_002.pdf（2019年9月29日アクセス）

（加藤一 早稲田大学大学院修了生・池上一 早稲田大学）